

初期荘園をめぐる変革と展開

——とくに労働主体の変移からみた初期荘園の耕営構造の再編成を中心に——

奥　野　義　雄

はじめに

日本の荘園制史の研究において、とりわけ初期荘園の研究は藤間生大氏によって位置付けられ、〈北陸型荘園〉などの形態名称も生みだされた^①。この形態名称のことはともかく、東大寺領荘園をもって発生期荘園を総括的に捉えた同氏の初期荘園の提示は、その後の荘園史（荘園制度史）研究に影響を及ぼし、その是非が諸先学によって論じられてきた。これによって、初期荘園が崩壊した後に新しい荘園機構つまり寄進地系荘園が成り立つとする従来の見解に対して、初期荘園は崩壊するのではなくして初期荘園（機構）の変革によって次の新しい荘園機構に繋ぐ解釈・理解へと展開してきたと考えられる。

この新しい解釈・理解には、初期荘園変革の基盤に労働力の編成が据えられた。この労働力の編成は、表現こそ異なるが、耕作形態の〈賃租〉と〈請作〉から初期荘園を究明しようとした小野武夫論^②、百姓・寺社・王臣家による野占地開発期（第一期）を経て野占後の開発田没収と百姓耕地の強制買い上げ・交換による荘園一円化形成期（第二期）を提示した丸山幸彦説^③、そして初期荘園（成立）に国家公権がかかわりながら寺領経営は展開し、この展開基礎における労働力によって開田化させていく請負主体Ⅱ有力首長層（郡司層、郷村長層、有力農民層など）

とその開田化の労働編成を想定して論究した藤井一二説などがある。⁽⁴⁾

さらに、莊園における労働力の性格を奴隸的なものと捉える藤間生大、渡部義通両氏の説を批判して非奴隸的なものと把握する竹内理三、岸俊男氏らの見解にも、「基本的な労働力の問題」があると指摘する吉村武彦氏の労働力に関する論稿にも、傾聴すべき課題が含まれている。しかし、初期莊園の労働力について〈賃〉と〈租〉から捉えようとした理解には納得しがたい論理的構成があるといえなくはない。⁽⁵⁾

なぜなら、初期莊園における〈労働力〉を提示するならば、その背後にある〈労働力主体〉が具体的に指摘されなければならないのではなからうか。この〈労働力主体〉に対して〈賃〉方式であるか、〈租〉方式であるのかが論究されるべきであらう。

そして、初期莊園成立にともなう耕作形態から〈賃租〉Ⅱ班田農民と〈請作〉Ⅱ旧墾田所有者との二形態を提示した小野武夫氏の説には、〈労働力主体〉からみる問題点を含む——班田農民と旧墾田所有者の二形態の〈労働力〉に限定し得るものであるのかということを含める——が、具体的な百姓・農民や墾田主などの〈労働力主体〉は指摘されている。この指摘と同様に、初期莊園の開田化の請負主体としての郡司層、郷・村長層、有力農民層などを〈労働力主体〉と捉える藤井一二氏と、初期莊園成立にともなう雇庸労働力としての莊園周辺農民、浮浪人、逃亡班田農民などを〈労働力主体〉と把握する丸山幸彦氏の見解に対して、より一層深化した検討が必要となるのかもしれない。

そこには、初期莊園形成と展開、すなわち莊園の編成基盤にその中核となる〈労働力主体〉へ視点がおかれていないからであると考えたい。

したがって、初期莊園を編成・変革させて再生・展開させていった基盤には、国家的容認のもとで脈打つ〈労働力主体〉が存在していたといえよう（余儀なしたとせざるを得なかった「国家的容認」というべきかもしれない）。

ゆえに、ここでは初期荘園の編成・変革にとって必須条件の〈労働力主体〉に焦点を絞っていくことにしたい。

註

(1) 藤間生大「荘園の崩壊」および「荘園の本質」(『日本
荘園史』所収)

竹内理三「初期荘園の成立」(『日本歴史』第一〇五号
所収)および「初期荘園の分布形態」(『日本歴史』第一
〇六号所収)

(2) 小野武夫「成立期荘園の形成」(『日本荘園制史論』所
収)

(3) 丸山幸彦「初期荘園の形成と展開(上)(下)」(『日本
史研究』第一六五号・第一六六号所収)

(4) 藤井一二「初期荘園の成立と形態」(『初期荘園史の研
究』所収)

(5) 竹内理三「荘園の歴史的評価」(『日本歴史』第一〇三
号所収)

岸俊男「越前国東大寺領荘園の経営」(『日本古代政治
史研究』所収)

(6) 吉村武彦「初期荘園にみる労働力編成について」(『原
始古代社会研究I』所収)

これら以外に、奥野中彦「日本における荘園制形成過
程の研究」、弥永貞三「奈良時代の貴族と農民」、渡部義
通「古代社会の研究」、中村直勝「荘園園史の研究」、今
井林太郎「日本荘園制論」、竹内理三「寺領荘園の研究」、
西岡虎之助「荘園史の研究」上巻・下巻一・下巻二(と
くに上巻)、阿部猛「日本荘園成立史の研究」、そして安
田元久「日本荘園史概説」などで初期荘園に関する論及
があるが、枚挙に遑がないので、先学諸氏の詳細な論稿
名などは割愛する。

一、初期荘園の立荘を支えた墾田・口分田・治田

八世紀から一〇世紀に至る間に初期荘園は崩壊するという従来の理解から一転して、初期荘園構造の内部で変化
し、荘園発生期の八世紀以後、荘園機構が編成・変革されていくという捉え方へと展開されてきた。

この捉え方へと移行した契機の一つに、丸山幸彦氏の論考があり、従来の初期荘園の認識への再考を促した。そ

して、同氏の論及で、初期荘園を第一期と第二期とに分けて、初期荘園が再編されることと、初期荘園の展開にみる労働力主体の変移について提示されたことは、初期荘園の研究に大きな前進をもたらしたと考えている。⁽¹⁾

ただ、初期荘園における労働力主体および編成については、従来から若干の先学諸氏によって、その課題が提起されてきた。⁽²⁾

たとえば、その内の一人である藤井一二氏は、東大寺領荘園を対象にした初期荘園研究は、〈賃租方式〉と〈労働力編成〉に関心がよせられたが、〈労働力編成の在り方〉と〈荘園機構の関係〉に対して十分な検討がなされたとはいえないとして、「賃租農民と奴隷労働等を含む耕営労働力の編成の在り方」を究明すべきであると言及している。⁽³⁾

このように初期荘園研究において、労働力編成あるいは労働力主体の究明は、荘園構造（機構）の再編成を考える上で重要な役割を果たすことになるというよう。

だが、労働力主体の言及で提示されてきたのは、〈奴隷労働力〉〈雇庸労働力〉〈農民余剰労働力〉〈耕地労働力〉などの労働力主体であり、その大半は実態として把握された労働力主体が提示されたものではなかったと考えている。

言い換えると、〈奴隷労働力〉の提示⁽⁴⁾においては、奴隷＝奴婢の概念認識下で現実的な奴婢の使役＝労働力の実態把握の立証がなければならない。また、〈雇庸労働力〉の明示⁽⁵⁾においては、荘園周辺農民、浮浪人、そして逃亡班田農民、あるいは家父長（郷戸主）的小世帯などの労働力の実態把握とその史料的立証への十分な検討が一層必要であるが、ただ史料的な制約をいかに克服するかが課題であろう。

さらに、初期荘園成立に重要な役割を担った墾田、口分田、そして治田の耕作人＝直接労働力主体である郷戸主や戸（戸口）とともに、九世紀中頃に近江国愛智荘に現われる田刀＝田堵⁽⁶⁾はその後の初期荘園編成（再編成）に繋

が労働力主体になり得ないのか、否かも重要な視点と考えられるのではなからうか（九世紀中頃以降、一三世紀に至るまでも田堵は（出現の田堵とその後田堵は同じではないが）存在し、荘園構造における労働力主体となっていたと想定し得る。また、この間の田堵は「寄人」や「在家」として捉えられていくことも窺える。⁷⁾

そこで、ここでは初期荘園史研究における労働力主体の実態把握を検討するとともに、順次「田堵」と初期荘園の再編との繋りの有無も考えていくことを主標として論及していきたい。

まず、初期荘園として周知されている越前国道守荘を事例に挙げて窺っていくことにしよう。

道守荘は、多くの先学諸氏によって初期荘園の究明で掲げられてきた荘園であり、荘園成立の基盤となった足羽郡大領生江東人によって墾田一〇〇町と七町一段余りの寄進は著名な史実として受け容れられてきた。

そして、生江東人の寄進した墾田が、道守荘を築く前段階の基礎になっていることもすでに岸俊男氏によって指摘されている。⁸⁾ただ、天平神護二（七六六）年十月二十一日付の「越前国司解」にみる。

足羽郡大領正六位上生江臣東人進功德分墾田七町一段三百五十四歩寺田大牙
便所進者

という文言の功德分墾田七町一段余りは、同国司解の後半に記述している詳細な条里坪付から窺える。

そして、同国司解にみる条里坪付、すなわち「西北二条十一宮処西新里十六野田上一町」以下、「二十味岡田分五段百二十歩」に至る田数合計は、「生江臣東人所進墾田七町一段三百五十四歩」と一致している。しかし、この墾田がどのような経緯で、生江東人が功德分として便進したものかは明らかではない。

東人の寄進墾田一〇〇町については、すでに触れたように天平神護二（七六六）年十月十九日付の「越前国足羽郡大領生江東人解」によって窺える。すなわち、「一 東人之所進墾田一百町之溝事」の記載に続いて、「以私功力治開、是以治得田、如員東大寺功德料進上已畢」と記述し、併せて、

一 墾田一百十八町

右、先後使勘定已訖、然之田不治開、先百姓之墾田并今新相交、是以依先案田籍造処、寺使僧并東人等、勘付已訖、(下略)

とあり(傍点―奥野、以下同様にて略す)、東人自身の私力で開拓した墾田と、これにともなう溝(農業用水路)を東大寺に寄進したことが分かる。また、新しく開墾した墾田と旧来の百姓墾田が相交わっていることも窺える。

このように道守荘は、生江東人の寄進による七町余りと一〇〇町の墾田を母体にして形成されたことがあらためて窺える。このことは、すでに岸俊男氏をはじめ先学諸氏によって指摘されている⁽¹²⁾。とくに、弥永貞三氏は、さきの越前国を挙げて墾田主が地方豪族と郷戸主・戸・戸口であることを提示されている⁽¹³⁾。

そこで、さきの国司解と各郷戸主・戸・戸口などの墾田売却の解案と関連づけるために、ひとまず「越前国司解」の道守村の記載を、長文にわたるが、次に挙げて検討することにしよう。

道守村田十二町五段二百四十歩……………(A)

相替百姓口分田二町三段二百五十八歩……………(a)

買百姓墾田十町一段三百四十六歩……………(b)

前買九段百八十四歩

今買九町二段百六十二歩

(中 略)

二十六寒江田四段二百八十八歩

分南三段草原郷戸主中臣小金戸口、車持石床
墾、先年買畢、今為寺田、

分北一段二百八十八歩中野郷戸守物部古
麻呂墾、買為寺田、

(B)

直稻四十三束二把

二十七寒江七段四十步

(中) 略)

分中二段七十八步同古麻呂壘、買為寺田.....(C)

直稻五十二束八把

(中) 略〔二十八・三十四省略〕

三十五寒江田二百八十八步中野郷戸主物部古麻呂壘、買為寺田.....(D)

直稻十九束二把

三十六寒江田四段二十步草原郷戸主宇治尔麻呂口分.....①

相替為寺田、代給同里十七寒江田

分四段二十步

十一上味岡里一葦原田二段岡本郷戸主道守床足壘、買為寺田

直稻四十八束

(中) 略〔五・九・十二省略〕

十三味岡田七段二百八十二步

分中四段二百八十二步江上郷戸主足羽熊毛壘、買為寺田

直稻百十五束

分中三段草原郷戸主酒部牛甘戸、同小國壘、買為寺田.....(E)

直稻七十二束

(中) 略〔二十一・二十三・二十六省略〕

初期莊園をめぐる変革と展開

西北三条九直尾里二十八熱灰五段

(中 略〔同条里三十三・十省略〕)

二十葦原田參段貳百八拾八步

分西二段二百八十八步 同竹麻呂口分、……………②

相替為寺田、代給西北一条十寒江里二十三寒江田二段二百八十八步

分東一段葦原郷戸・主物部黒公口分、……………③

相替為寺田、代給西北一条十寒江里三寒江分一段

(下 略)

とあり、天平神護二年の段階では、道守村(道守莊)の田地總数は一二町二四〇步であつたことが窺える(傍線一奥野)。そして、相替した百姓口分田二町三段二五八步(a)と買得した百姓墾田一〇町一段三四六步(b)から成り立つてゐることがわかる。

このことはともかく、いづれにしても道守莊の生江東人の寄進田(墾田)以前に、買得百姓墾田と相替百姓口分田が、道守莊の成立の母体であつたと想定できるとともに、「百姓墾田」「百姓口分田」という百姓とはどのような身分の者であつたかが窺える。買得墾田の旧所有者をみると、当然のことではあるが、ほとんどは郷戸主や戸・戸口である。すなわち、さきに触れた国司解の(B)(C)(D)の墾田の旧墾田主をみると、「中野郷戸守(奥野註)物部古麻呂壘、買為寺田」(B)、「同古麻呂壘、買為寺田」(C)、「中野郷戸主物部古麻呂壘、買為寺田」(D)と割註され、この天平神護二(七六六)年の「越前国司解」の翌天平神護三(七六七)年二月二十二日付の「中野郷戸主物部古麻呂解案」にみえる墾田数と合致する。すなわち、

中野郷戸主物部古麻呂解 申請墾田直事

合田四段二百九十四歩之^{荒一段七十八歩}
得三段二百十六歩

請直稻九十七束

西北一条十寒江里二十六寒江田分北一段二百八十八歩

二十七寒江田分中二段七十八歩^{荒一段七十八歩}
得一段

三十五寒江田分西二百八十八歩

右、件田直稻、依眞所請已畢、仍注事狀申上、謹解

とあり、末尾に「田主物部古麿」「男物部越万呂」と親子で連署している¹⁵。この解案から、田主である物部古麿（古麻呂）は、墾田四段二九四歩の直稻九七束を請取ったことが窺え、さきの国司解にみる物部古麿の墾田は、「買為寺田」という文言のとおり、東大寺に買ひ取られて東大寺田となったことを示している。

この古麿解案と同様に墾田数（E）と合致するものに「草原郷酒部小国解案」（「戸主酒部牛養戸口同戸口酒部小国」）がある¹⁶。

一方、口分田においては、相替の百姓口分田二町三段二五八歩は、すでに触れた西北一条十里三十六坪の四段二〇歩①、西北三条十里二十坪分西の二段二八八歩②、同分東の一段③を含めた合計田数二町三段三五八歩とは合致せず、口分田九筆を合算した田数の方が一〇〇歩多いことになる。さきに掲げた「相替百姓分田二町三段二百五十八歩」と「分西三段二百八十五歩^{草原郷戸主宇治宇尔麻呂口分}」以下八筆の口分田合計の二町三段三五八歩のいずれかが誤記であろう。

このことよりもむしろ九筆の口分田の旧所有者がすべて郷戸主であることに関心がひかれる。すなわち、「上家郷戸主山守五十公口分」「利刈戸主秦井出目麻呂口分」「草原郷戸主刑部若麻呂口分」「足羽郷戸主秦荒海口分」「草原郷戸主物部動神口分」「安味郷戸主山道竹麻呂」「草原郷戸主物部黒公口分」などという文言にみる七名の戸主の¹⁷

口分田であつたことが窺える。そして、七名の戸主は、旧墾田主（所有者）同様に「百姓」と把握されていた。

この口分田と墾田については、弥永貞三氏は「何故に口分田の場合は戸主のみが文書に注記され、墾田の場合は何故に戸主、戸（戸口）等と注記されたかを考えて見る必要がある」と指摘¹⁸されているが、口分田の場合には、相替によつて寺田化される要件の一つに大寺院の権力強行があると藤間生大氏によつて提示されてきた¹⁹。しかし、「〇〇郷戸主某口分」と表現される事由を想定するならば、そこには大寺院の権力行使を直接的要件と考えるよりも、解体過程（進行中）とはいへ律令国家の国衙公権が大きく関与しているゆえに、百姓口分田に「相替為寺田」という情況が成り立つたと考えられ、墾田に国衙公権を行使する余地はなく、私的所有権とのかかわりが存在していたゆえに旧墾田主名の戸主・戸（戸口）が注記されていたと素朴に想定すべきではあるまいか。

このことはともかく、道守荘の立荘の基盤は生江東人の寄進地と百姓（沽却）の墾田であり、これに加えて百姓口分田（相替）が若干存在していたこととなる。

道守荘のように初期荘園が主に墾田を基盤として成り立つとはかぎらない。このことは、次の二つの初期荘園の基盤を窺うことによつて理解し得るであろう。

すでに掲げた「越前国司解」にみえる初期荘園として形成していく栗川村Ⅱ栗川荘と子見村Ⅱ子見荘がそれであり、まず同国司解の栗川村の田地状況をみると、

栗川村田五町

乗田相替八十九歩

百姓口分田相替四町三段五歩

百姓墾田相替六段二百十六歩

西南三条六路田里三十一奈麻利田七十二歩
上家郷戸、主別表麻呂口分

三十二奈麻利田一百四拾步同・荻麻呂口分

相替為寺田、代給西南五条七葦原里

十二葦原田分二百十二步

(中略)

分六段上家郷戸主・野於非太口分

相替為寺田、(中略)

五野田四段十二步

分二段百二十五步岡本郷戸主・部・豐足口分

相替為寺田、(中略)

分一段二百四十七步岡本郷戸主・生江大園口分

相替為寺田、(中略)

六山田六段二百四十六步

分五段伊濃郷戸主・東守麻呂口分

相替為寺田、(中略)

分一段二百十六步上家戸主・別破口分

八葦原田里七野田九段

分三段上家郷戸主・丸部五嶋口分

相替為寺田、代給西南五条七葦原里一葦原田分三段

(下略)

初期莊園をめぐる変革と展開

とあり、墾田三筆と口分田一五筆が栗川荘の基盤になっている。そして、立荘の基盤に口分田が大きくかわり、道守荘の成り立ちとは異なる。さらに、墾田・口分田ともに、寺田化すべき相替の対象となり、田地の旧所有者はいずれも戸主である。

たとえば、墾田の場合、「野田郷戸主栗田広足戸、同乙嶋墾」「野田郷戸主栗田百方墾」「野田郷戸主別荻麻口分」と明示され、野田郷戸主（二件）と同郷戸主の戸（一件）である。また、口分田の場合、「上家郷戸主別荻麻口分」「上家郷戸主忌部大倉口分」「野田郷戸主依羅虫麻呂口分」「岡本郷戸主部豊足口分」「伊濃郷戸主県守麻呂口分」などと割註に記載されている。さらに、墾田と口分田の両方の旧所有者は、「野田郷戸主栗田広足戸、同乙嶋墾」と「全輪正丁口分」を除くとほとんどが百姓としての「戸主」である。

このように栗川荘は、口分田を基盤に寺領の一円化をはかって成立していったと考えられる。栗川荘が口分田をもとに東大寺領荘園として展開していくのと同様に、越前国坂井郡の子見村Ⅱ子見荘も百姓の口分田の相替を基盤に荘園の一円化を目指していったといえよう。また、口分田の相替は、「足羽郡全輪正丁口分」云々という口分田を除くと、それ以外の口分田の旧所有者は「郷戸主」である。

このことを示す子見村Ⅱ子見荘の箇所を、さきに掲げた「越前国司解」からその一部分を次に挙げてみることにしよう。すなわち、

合田三十町九段一百五歩

百姓口分田相替二十七町六段三百二十一步
百姓墾田前買今改付三町百四十四歩

子見村田十三町七段二百二十二歩

並百姓口分
田相替者

西北六条四大口里三十四神田八段二百四十歩

分西六段二百四十歩 長畝郷戸主物部稻倉口分、

相替為寺田、（中略）

分中二段足羽郡全輪正丁口分、

相替為寺田、(中略)

三十五椽門田一町二百四十步

分東二段八十八步粟田郷戸主蘇宜部五百公口分、

相替為寺田、(中略)

分西二段荒伯郷戸主三國真人野守口分、

相替為寺田、代給西北六条四大口里二十七門田分一、二十六門田分一段八十八步、

(下略)

とあり、東大寺領として相替された口分田の旧所有者のほとんどは、郷戸主であることが窺える。子見荘の一円化をはかるために、大半の口分田のほかに買得していた百姓墾田の三町二段余りが含まれていたこともわかる。

このように栗川荘のように荘園の一円化にともなう荘田構成の基盤が百姓墾田ではなくて、百姓口分田である初期荘園の存在は、荘園成立期の〈寺院〉——〈在地豪族〉——〈百姓〉あるいは〈寺院〉——〈百姓〉との繋りと、〈国家公権〉——〈寺院権力(勢力)〉の關係が反映していることを暗示しているようである。

このような事象と同様なことを想定し得る初期荘園として高庭荘を挙げることができる。高庭荘は、荘園成立にともなう田地構成は百姓治田を数多く含んだ荘園である。

次に高庭荘の田地構成を若干垣間みることにしよう。延喜五(九〇五)年九月十日付の「東大寺領因幡国高庭荘坪付注進状案」をみると、

東本

□□寺高庭荘田地七十三町余

天平

□□勝宝七年図注

初期荘園をめぐる変革と展開

北一条散岐里

十七坪山

十八坪

清水寺田六段 大・私・人・丸・治一段百四十四步

大・私・国・栖・治四段二百十六步

(中 略)

北七条大坊里

一坪九段百二十步 公・田

二坪四段 神・雄・手・治二段
神・国・足・治二段

三坪一段二百十六步 海部治丸

四坪无図

(下 略)

とあり、口分田(五段三三〇步)と乗田(四段二七六步)を若干含むが、大半は治田(三町三四〇步)と公田(三町二段九八步)であることが窺える。しかし、治田の旧所有者が戸主や戸・戸口と称される百姓であったか、否かは明らかでない。

また、同坪付注進状案に記載されている宝亀四(七七三)年の坪付をみても、公田を上回って百姓治田の田数は若干増加している。そこで、宝亀四年の坪付注進を次に掲げてみることにしよう。

北一条散岐里十七坪山 十八坪六段 公・田一段百三十四步

十九坪一町一段 私・足・国・本・治二段 公・田一段百三十四步
目下 部弘足土治四段 薬師寺二段

北二条土浦東里外十七坪四段 東大寺田、今治

十三坪四段七十二步 公(田脱カ)

十六坪六段百三十二步 公田

(中 略)

北七条大坊幸一坪九段百二十歩 大宮町黒負治二段、私知丸治一段、
公田四段二百八十歩、間人赤井治百九十九歩大東

二坪四段 神国足治二段
口緒手治二段

三坪一段二百十六歩 東大寺田

四坪无地 五坪无地

八坪不注図

九坪二段 東大寺田治一段百四十四歩

(下 略)

とあり、百姓の治田以外の田地も増加している。同莊坪付注進案の弘仁一四(八二三)年と嘉祥三(八五〇)年の治田の旧所有者名をみると、「北三条草尾里」八坪一坪一町一段二十六歩 源平治八段三百三十歩
公田二段五十六歩、「北七条大坊里」一坪九段百二十歩 藤原繩主治、「(北七条大坊里) 十五坪一町十七坪九段 已上藤原繼治」云々という文言にかわつてゐる。

この文言に表示されている「藤原繩主」は、承和九(八四二)年七月二十四日付の「因幡国司解」にみえる「故從三位藤原朝臣繩主買得田地五十五町一段三十九歩」という記載の人物であり、この時点では百姓治田ではなく、春宮坊大夫である藤原繩主所有の治田であつたと考えられる。また、同解に明示されているように、延喜二〇(八〇一)年には繩主に五五町余りの田地を沽却し、延喜二十二年には八町七段余りの田地を売り渡していたことがわかる。

この沽却田地についてはともかく、弘仁一四年代階までは、藤原繩主や藤原藤繼らの所有ではなく、百姓治田を多数含む荘田であつたことにならう。⁽²⁵⁾

したがって、初期荘園が荘園として機能する基礎には、主に未開地・野地などではなく、むしろ開墾・開拓されて賃・租の対象となる現耕地である百姓の〈墾田〉〈口分田〉〈治田〉であり、初期荘園の荘田の大半が墾田であるか、口分田であるのか、さらに治田であるのかによつても初期荘園の形成とその後の展開は(発展するか、消滅す

るかという意味も含め）異なっていくであろう。そこにこそ、耕作主体である百姓の労働力によっても状況は大きくかわることを視野に入れるべきであろう。

そこで、初期荘園の再編をもたらしした要因を検討するために、荘園耕地に注がれた百姓（農民）の労働力も荘園再編の一要件と考えて、先学諸氏の視点と同様に、次に労働力主体の変移を検討することにしよう。

註

(1) 丸山幸彦「初期荘園の形成と展開（上・下）」（『日本史研究』第一六五・一六六号所収）

吉村武彦「初期荘園にみる労働力編成について」（『原始古代社会研究Ⅰ』所収）

藤井一二「初期荘園の経営と構造」（『初期荘園史の研究』所収）

初期荘園の再編と労働力に関する以外に、奴隷労働を含んだ労働力についてと東大寺領初期荘園に関する主な論稿を次に挙げておくことにする。

藤間生大「荘園の本質」（『日本庄園史』所収）、同氏によつて、初期荘園の研究が展開され、奴隷労働が提示された。

竹内理三「荘園発生期の東大寺領」（『日本上代寺院經濟史の研究』所収）

弥永貞三「聚落と耕地」（『奈良時代の貴族と農民』所収）

岸俊男「越前国東大寺領荘園の経営」（『日本古代政治史研究』所収）

渡部義通「初期荘園の構造と生産諸関係」（『古代社会の構造』所収）

西岡虎之助「初期荘園制における土地占有形態」（『荘園史の研究』上巻所収）

阿部猛「律令制から荘園制へ」（『日本荘園成立史の研究』所収）

小野武夫「成立期荘園の形態」（『日本庄園史論』所収）

奥野中彦「日本における荘園制の形成過程」および「律令制と荘」（『日本における荘園制形成過程の研究』所収）

鷲森浩幸「寺院の大土地所有の性格と様相」（『日本古代の王家・寺院と所領』所収）

(2) 吉村、前掲書

丸山、前掲書

(3) 藤井、前掲書

(4) 藤間、前掲書

渡部、前掲書

(5) 丸山、前掲書

藤井、前掲書

(6) 『平安遺文』第一卷、第二二八号文書同文書に現われる

「田刀前伊勢幸依知泰公安雄」などがそれである。

(7) 奥野義雄「田堵をめぐる存在形態―田堵の展開と実態によせて―」(『鷹陵史学』第二九号(佛教大学史学会刊)所収)

(8) 岸、前掲書

(9)(10) 「東南院文書之二」第五一五文書(『大日本古文書・家わけ一八 東大寺文書之二』所収)

(11) 「東南院文書之二」第五一二号(前掲書)

(12) 岸、前掲書

(13) 弥永、前掲書

(14)(15) 「東南院文書之二」第一五一号文書(前掲書)

(16) 「東南院文書之二」第五二二号文書(前掲書)

(17) 「東南院文書之二」第五一五号文書(前掲書)

(18) 弥永、前掲書

(19) 藤間、前掲書

(20)(21) 「東南院文書之二」第一五一号文書(前掲書)

(22) 〱(24) 「東南院文書之二」第五三七号文書(前掲書)

(25) 阿部猛「八〱九世紀の莊園」(『日本莊園史』所収)

同論稿の付表では、高庭莊の天平勝宝七年〱天慶三年までを詳細に推移して明示されている。また、奥野中彦氏も旧図と関連づけて高庭莊について論及されている(前掲書)ので参照されたい。

二 初期莊園の再編をめぐる労働力主体

初期莊園が成立する基盤には、墾田のみではなく、口分田や治田が存在することを窺ってきた。そして、初期莊園の領主(本家または領家という立場の階層、後の莊園領主と称される階層)である大寺院が買得した墾田、口分田、治田などの旧所有者は、ほとんど「百姓」と称された戸主・戸・戸口である。相替された口分田や治田の旧所有者も戸主または戸(戸口)である。

このことは、すでに窺った天平神護二(七六六)年十月二十一日付の「越前国司解」の道守村の相替の百姓口分田と買得の百姓墾田に明示されている中野郷戸主の物部古麻呂の墾田売却状況とともに、天平神護三年二月二十二日付の「中野郷戸主物部古麻呂解案」によっても理解し得る。^②

さらに、道守村が道守荘として立荘したと考えられる七五〇年代後半頃、生江東人が寄進した一〇〇町とともに、功德分として寄進した七町一段余りの墾田、そして道守村田地（相替百姓口分と買得百姓墾田ほか）の一四町八段余りの莊地があつたことになるが、東人の一〇〇町と七町一段余りの墾田を除いたとしても、一四町八段余りの墾田と口分田の旧所有者は、百姓である戸主や戸（戸口）である。しかし、買得および相替の墾田や口分田の耕作（耕営）は、東大寺自ら執行したものであろうか。

言い換えると、東大寺は道守荘の経営において、買得した墾田は旧開墾田主に、また相替した口分田は旧所有者に耕作を請負わせ、売却した旧墾田主である戸主・戸・戸口は旧所有の墾田を耕作し、相替された旧口分田所有者は旧所有の口分田と相替後の口分田を耕作したものかも知明らかではない。

つまり、売却した旧墾田主や相替され旧口分田主が、旧墾田や旧口分田の耕営で關係を保持していたものか、否かというその後の史料が皆無であるため、この情況を明確にし得る手だては、現段階ではないに等しい。

しかし、百姓墾田を買得し、百姓口分田を相替させて道守荘の一円化を図った東大寺によつて、生江東人の寄進の墾田を除いたとしても、墾田と口分田を含んだ一四町八段余りの「寺田」の耕営には、従来より言及されているように奴隸的身分の人たちによつておこなわれたと想定し得るかもしれない。

そして、買得および相替の墾田と口分田の一四町八段は、旧所有者の墾田主と口分田主に耕営させていたとも考えられる。さらに、旧所有者による東大寺領の〈寺田〉を耕営する場合にも奴隸的身分の人たちを使役したと想定できる。つまり、東大寺あるいは旧所有者のいずれが耕営したとしても、買得墾田や相替口分田の直接の耕作人として奴隸を使役したと考える方が妥当であるかもしれない。

なぜなら、買得墾田および相替口分田の所有者である東大寺と旧墾田主・旧口分田主である戸主・戸・戸口などの百姓は、「奴隸」という〈賤〉を所有していたことは、次の史料から窺えよう。すなわち、東大寺の場合、宝龜

三(七七二)年十二月三十日付の「東大寺奴婢籍帳案」をみると、

申上宝龜三年奴婢籍帳事

合・奴・婢・二・百・(麻漕)上・下同シ「二」人「孫漕」「奴」

奴九十「七」人

婢一百「五」人

官・納・奴・婢・一・百・五・十・「八」人

奴七十「七」人

婢八十一人

諸・国・買・貢・上・奴・婢・三・人

奴二人

婢一人

寺・家・買・奴・婢・二・十・「三」人

奴「九」人

婢十「四」人

大宅朝臣可是麻呂貢上奴婢一「八」人

奴「九」人

婢「九」人

逃亡奴婢十「四」人

奴「九」人

初期莊園をめぐる変革と展開

婢「五」人

見定奴婢一百八十八人

奴八十「九」人

婢九十「九」人

(中 略)

編首婢麻祁佐女<sup>年二十九
有日本黒子</sup>

正婢

女婢道女^{年四}

「黄」婢

編首奴高人<sup>年三十二
右高煩黒子</sup>

正奴

男奴御舩麻呂^{年二}

「黄」奴

女婢民刀自女^{年六}

小婢

右一百五十「四」人、以天平勝宝二年三月^{三言}從官奉納奴婢

(下 略)

とあり(傍点^⑤奥野、以下同様にて略す)、東大寺が所有する官納・諸国買貢上・寺家買・大宅可是麻呂貢上などの奴婢は二〇二人であつた。その内、天平勝宝二(七五〇)年の買得の奴婢は二六人であつたことが窺える。ただ、実際にこれだけの奴婢が耕營に携わつたかは明らかではないが、大半の奴婢は耕作に従事してゐたであろう(だが、東大寺領莊園は道守莊および越前国のみではないので、どけだけの奴婢が現実に耕作に従事できたかは未知数である)。

一方、墾田や口分田の旧所有者で百姓である戸主・戸・戸口らも奴隸を所有していたことが、次の天平勝宝二年五月十七日付の「大宅朝臣可是麻呂貢財文書案」から充分想定し得るであろう(越前国各郷戸のものではないので、

明確に立証し得る史料とはなり得ないことが難点である。すなわち、

三十二人^(付可)□□是麻呂之戸賤。

六人 未除本籍

婢二十三人

十八人 付可^{付可}是麻呂之戸賤、

五人 未除本籍

奴飯村^{年十八}

奴大倉^{年二十四}

(中 略)

奴法麻呂^{年五十二}

右三十二人、所貫大倭国添上郡大宅郷戸主大宅朝臣可^是是麻呂戸賤。

奴鑑取^{年八}之人之男、在右京四条四坊戸主鞠智足人戸口、以前天平十一年勤、

奴国勝^{年十四}刀美女之男、

奴若麻呂^{年十四}刀美女之男、山背国紀伊郡大里郷戸主茨田連^是知万呂戸、以前養老元年勤、

(中 略)

婢広女^{年十八}

婢稻女^{年十三}

右十八人、所貫可^是是麻呂戸賤。

(下 略)

初期莊園をめぐる変革と展開

とあり、すべての奴婢は郷戸主の戸の「賤」か、郷戸主の戸口の「在」あるいは「所實」のものであったことがわかる。

また、郷戸主の「賤」として奴婢が所有されていたことを、天平勝宝二（七五〇）年四月二十二日付の「美濃国司解」の「申進上交易賤事」から窺える。すなわち、

合六人奴婢三

価稻四千九百束 二人充合一千束 二人各八百束
一人七百束 一人六百束

（中 略）

奴・益羽年一五 左目下黒子

価稻七百束

右、加茂郡小山郷戸主上連稻実之賤。

婢・乎久須利売年二十二 左目後黒子

価稻八百束

右、厚見郡草田郷戸主物部足麻呂之賤。

（中 略）

以前、被民部省去天平勝宝元年九月二十日符称、被太政官同月十七日符称、（中略）、奉 勅、奴婢年三十已

上、容貌端正、用正税充価直、和買貢進者、省宜承知、（下略）

とみえ、天平勝宝元（七四九）年九月十七日付の「太政官符」によって正税をもって奴婢（六人）を買得して貢上したことがわかるとともに、美濃国内の郷戸主ではあるが、各郷の戸主の「賤」である奴婢を所有していたことが窺える。

これらの奴婢の交易および貢進の史料から、おそらく他郷の戸主下の戸口などを戸主あるいは戸の「賤」として奴・婢が所有されていたことが理解できる。しかし、これらの史料は、戸主や戸が所有する「賤」である奴婢の全

貌を明示してくれるものではない。

このように東大寺はいうまでなく、越前国の道守荘に関連する郷戸主・戸・戸口などの百姓にかかわる奴婢の存在を明示する史料は皆無であるが、道守荘形成にかかわった墾田主や口分田主であった戸主・戸・戸口などの百姓が所有していた奴婢の存在は容易に考えられる。

さらに、天平宝字二(七五八)年以前には、さきに触れた生江東人は、越前国大領任官以前から数多くの奴婢を所有していたと充分想定し得るであろう。

したがって、買得および相替の墾田や口分田の耕営において、東大寺⇨奴婢⇨荘田耕作という図式、あるいは東大寺⇨戸主・戸(戸口)⇨他郷戸・戸口⇨奴婢⇨荘田耕作という図式を想定するならば、買得墾田や相替口分田などの直接的耕作者の大半は奴婢であり、耕作の労働力主体は奴婢であったと考えられなくはない。ただ、戸主や戸(戸口)は奴婢の所有者であるのみならず、彼らも荘田(旧墾田・旧口分田など)耕作の労働力主体であったと考えられよう。とりわけ、さきの東大寺⇨戸主・戸(戸口)⇨他郷戸・戸口⇨奴婢⇨荘田耕作という図式で耕営をおこなう場合には、〈奴隷労働〉を想定すべきであろう。

しかし、生江東人の寄進した墾田の耕営における労働力主体がいかなる階層であったかは明確に提示しがたいが、東人⇨東大寺⇨戸主・戸(戸口)⇨他郷戸・戸口⇨奴婢⇨荘田耕作の図式が妥当であろう。さらに、この図式の変形として、東人⇨東大寺⇨東大寺奴婢⇨東人貢進奴婢⇨荘田耕作というもう一つの図式が考えられる(だが、東人貢進奴婢と東大寺奴婢による耕作を想定すべき直接的あるいは間接的史料は現段階では検出し得ない)。

この想定よりもむしろ、天平宝字元(七五七)年十一月十二日付の「越前国使解」の「治開田四町九段・充功・稻・四・百・九・十・束・段別充七束」・「当年地子并田並雜物勘定」云々という文言から、^⑩百姓による耕作が考えられる。さらに、天平宝字二(七五八)年正月十二日付の「越前国坂井郡司解」にみえる

不堪進上地子事

右、被去天平宝字元年九月十四日符称、寺家所進墾田一百町之地進上者、謹依符旨可進、雖然、(中略)、校寺家田定畢、今當田貴賤、元春三箇月之間、苗子下共競作為常、而所進田一百町、此者苗子下畢、過競作時後、亦寺財校治賜時野馳、以是元年之地子所進不堪、望請、始當年將進地子、(下略)

という記載から、^⑪寄進された一〇〇町の墾田を「貴賤」ともに競作することを通常としていたことと、^⑫競作後の墾田一〇〇町の東大寺への寄進をおこなうために、去年の地子進上は耐えがたいので、当年より地子進上をおこなうことが窺える。そして、貴賤すなわち百姓(戸主・戸・戸口など)や奴婢を含めた諸階層の労働力が主体となつて寄進墾田を耕作したことが示唆されていると考えられる。

この二つの解文は桑原莊(国使解)と鯖田・国富莊(郡司解)に関する史料であるが、道守莊の立莊の契機となつた寄進墾田の耕営にともなう労働力主体を想定させるには充分な例証史料となるであろう。二つの解文を例証史料と考えるならば、生江東人が東大寺に寄進した墾田の労働力主体にかかわる図式は、すでに触れた図式を改めて、東人(開墾) ↓ 百姓(戸主・戸・戸口など)・奴婢(奴婢) 使役? ↓ 東人 ↓ (寄進) ↓ 東大寺 ↓ 奴婢使役?・百姓請作? ↓ 百姓 ↓ 百姓奴婢(賤) + 東大寺 ↓ 東大寺奴婢(賤) ↓ 莊田(墾田など) 耕作となろう。つまり、百姓(戸主・戸など)と彼らが所有する奴婢、さらに東大寺奴婢の労働力を投入した墾田耕作(耕営)が繰り広げられたと想定し得るであろう。さらに、この耕営主体・東大寺を支える百姓(とくに戸主であり、戸主と関連深い戸と戸口が末端に位置する)は、墾田寄進者と政治的に繋がりを持っていたと考えるべきかもしれない。

このように一般的な中小規模の開墾・耕作はいうまでもなく、大規模な開墾・耕作においても、「賃租」あるいは「請作」の形態、^⑬「雇庸」や「請負」の形態などが認識されているが、^⑭いずれにしても「百姓」として把握されている戸主・戸(戸口)などの労働力や奴婢 ↓ 奴婢の労働力は、^⑮墾田・口分田などの耕作にとつて必須条件であつ

たといえよう。

したがって、道守荘において百姓や奴婢は、荘園形成・成立にともなう労働力主体であつたと考えられる。そして、百姓や奴婢が栗川荘、子見荘、高庭荘においても労働力主体として存在していたことは、充分に考えられる事象であろう。

では、道守荘をはじめ、東大寺領初期荘園において、荘田（墾田・口分田など）の耕営に労働力主体である百姓や奴婢が従事して、荘園の耕地開墾と拡大に勤めたのであろうか。

すでに明示したように現時点でこのことを立証し得る史料の検出は不可能に近いが、従来と同様に労働力主体の百姓や奴婢による開墾と荘園（耕地）拡大の足取りを示す荘園耕地面積の増減を辿るしかないのかもしれない。

そこで、まず道守荘の立荘時の荘園耕地面積とその後の耕地面積を対比しながら、労働力主体の百姓である戸主・戸（戸口）や奴婢として理解されている奴婢の動向を考えていくことにしたい。

道守荘の場合、七五〇年代後半頃であろうか、立荘当初の荘園耕地は、すでに明示してきたように、①生江東人寄進墾田一〇〇町、②同東人寄進墾田七町一段三五四歩、③東大寺買得墾田・口分田一二町五段二四〇歩の計一九町七段二三四歩であつた。

その後の道守荘（荘田数）の状況は、天曆四（九五〇）年十一月二十日付の「東大寺封戸荘園并寺用帳」と長徳四（九九八）年の注文定の「諸国荘田地」から窺える。すなわち、天曆四年の同帳には、

越前国田七百六十八町九十九歩

丹生郡椿原荘五十町

足羽郡道守荘田三百二十六町二段五十五歩

鎧荘田百町九段二百八十八歩 糞置荘田十五町八段六十八歩

(下 略)

と、また長徳四年注文定の諸国莊田地にも、^{①⑥}

越前国 七百三十町八段六十八歩

丹生郡椿原莊五十町

足羽郡道守莊田三百二十六町二段五十歩

同郡鉦^{①⑦}莊田百町九段二百八十八歩

同郡 糞置莊田十五町八段二百六十歩

(中 略)

右件莊々田地、以荒廢地子不登、

という記載がみえ、^{①⑦}天曆四年と長徳四年の道守莊の莊田には若干の差異(五五歩と五〇歩)があるが、立莊時の約三倍の三百二十六町二段余りの莊田に増加している。立莊時から約二四〇年後の長徳四年には三倍近くに増えているが、天曆四年から約五〇年後の長徳四年には莊田の増減はなく、ほぼ天曆四年の莊田数のままである。そして、長徳四年注文定の道守莊を含めて、越前国諸莊園では、莊田の荒廢があつて地子が登らなかつた(地子収取不可能なほど收穫物が実(登)らない)という情況であつたことが窺える。ただ、長徳四年の道守莊を含めて越前国の諸莊園の莊田数は名目的な莊田数値であり、実質的ににはどれだけの現作耕地の莊田が存在していたものかは把握しがたいという疑義を挟むこともできよう。

このことはともかく、天曆五(九五)年十月二十三日付の「越前国足羽郡庁牒」の次の記載をみるかぎり、すでに道守莊をはじめとして、越前国の諸莊園は、「地子不登」という表現による〈地子収取不可能〉なほど莊田荒廢が進んでいたと考えられる。すなわち、同郡庁牒には、

隨即九月五日、於国来着、欲寄勘等莊、之間、荒野之由云々、(中略)、乞衙察狀、任檢佃帳、作人慥欲被示送者、今任来牒狀、檢案内、道守・鎧莊田、雖在条里、本自或荒野或原沢、更無□寄作人、糞置莊田、曾所不開也、(下略)

とあり、越前国足羽郡の郡司に道守莊をはじめ、鎧莊や糞置莊の莊田狀況の勘察を乞い求めた応答として、道守莊と鎧莊は(耕地のための)条里があるといつても荒野あるいは原沢の状態で寄作人もいない有様であり、糞置莊の莊田は開作されていない状態であることが明示されている。

この郡庁牒の記載によるかぎり、天曆五年、つまり九五〇年代には、すでに東大寺領越前国諸莊園の数多くの莊田は、荒廢化していたことになる。その上、道守莊や鎧莊には「寄作人」が居なかったことを指摘している。二つの狀況は、道守莊と鎧莊に寄作する人たちが存在しなかつたゆえに、莊田耕地が荒廢していったことを示唆しているといえよう。

ところで、この「寄作人」に視点を移すと、さきの足羽郡庁牒に明示されている「寄作人」が、いわゆる「寄人」の初見であり、九五〇年代以降に現われてくることになる。この寄作人すなわち寄人は、莊園における莊民と捉えられて、「労働莊民型から借地莊民型へと移行」したものと理解されていると¹⁹に、私的に從属關係をもつたものと認識されている²⁰。

この「寄人」は、九五〇年代以降、史料に次第に現われ、一三〇〇年代には消え去っていくが、九五〇年代以降から一〇〇〇年代初頭までの四つの史料を次に掲げて、初期莊園における労働力主体と編成を検討しよう。

(A) 天曆七(九五三)年八月五日付「民部省符案」²¹

件莊家水田朱雀院所領也、而依宣旨、以去天曆二年二月二十八日施入寺家、爰可免除莊田租稅莊司寄人雜役之由、(中略)、而国宰称不載坪付、不給省符之由、猶課雜役、(下略)

(B)天禄四(九七三)年九月一日付の「東寺伝法供家牒」²²⁾

一 欲被下符於多紀郡、任先牒旨、令免除剩田収公荘司、寄人臨時雜役、(下略)

(C)長徳二(九九六)年七月二十五日付の「太宰府左郭勘申案」²³⁾

右件地内東三段、府掌中臣助保住所、請申了、但西□□一町者、以先日前専当僧聖蓮請申之日、依上外題勘□已了状、而未入寄住、抑可隨処分、仍勘申、

(D)寛弘六(一〇〇九)年十月二十八日付の「東寺伝法供家牒」²⁴⁾

牒、件荘田、去承和十二年九月十日奉 勅施入、隨則依官省符旨、(中略)、免除官物租税臨時雜役等已了、(中略)、代々国宰曾無収公之妨、若有収公之時、訴愁於国衙、皆以免除、而年来人民多亡、已無人寄作、因之、久以荒廢、適頗開作之年、具注子如此之由、(下略)

寄住・寄人・寄作人にかかわる四つの史料から、寄人の雜役免除に関すること「(A)と(B)の史料」、単に一町の耕地に寄住する人(寄作人)がいないこと「(C)史料」、そしておそらく官物臨時雜役免除と荘田に寄作人がいないために久しく荘田は荒廢していること「(D)史料」が読み取れる。さらに、大雑把であるが、四つの史料をみるかぎり、寄作人は荘田(荘地)あるいは耕地の領域内に寄住し、寄作していたことがわかり、寄作人≡寄住≡寄人と考えられるとともに、もともと臨時雜役が賦課されていたことが理解し得る。

したがって、莊園耕地(田地)の領域に寄住して耕作に従事する直接的な労働力主体である寄作人・寄人の耕作(労働力)がないために莊園耕地が荒廢してしまったという情況は、寄作人・寄人の労働力によって莊園の耕営が成り立っていることを示しているといえる。

また、寄作人と浮浪人とを関連づけられた村井康彦氏は、〈寄作浪人〉について論究されて、「元慶五(八八一)年に清和院領近江国大浦荘二八町五反余が延暦寺に施入されたさい、同時に寄せられた『庄内浪人』というものも、

事實は大浦莊の開墾者であつた」と推察⁽²⁵⁾する。この言及は、浪人（浮浪人）―莊内寄住⇨寄作人（寄人）という図式を想定させてくれる。確かにこの図式に比定し得る史料として、村井氏は承和八（八四二）年二月十一日付の「某家政所告状案」の記載を掲げられている。すなわち、

件浪人元是寺家莊所管也、以此成農業、而頃年被寄院莊、每事不□、寺家業歷年^{（金課カ）}廢怠、地子累時闕乏、望請、件浪人濟莊家事者、宜也知狀、子細勘定、（下略）

という文言がそれであり、同氏は「莊園の耕営における浪人の地位と役割をよく物語る史料」と指摘するとともに、「耕作の主体が浪人であつた」と言及⁽²⁷⁾されている。

ただ、この告状案の「可勘定申上浪人事」と限定した上で、「而頃年被寄院莊」「寺家（産）業歷年廢怠」という文言の状況とは、近頃某院領莊園に寄せられた（寄作された）ので、寺家の産業⇨農業は廢怠して、「地子累時闕乏」という事態であるが、同氏の指摘するように浪人⇨寄作浪人が、かならずしも莊園耕地が荒廢して地子未進に至るほど耕作に従事する主体的労働力であつたとはかぎらないかもしれない。

むしろ、さきの（D）史料に明示されている「年来人民多亡」という文言のように莊園耕地を耕作していた年来の人民（莊民）が多数逃亡し、寄作人もないゆえに、耕地は久しく荒廢したと考えられ、労働力主体とは人民（莊民）と浪人を含んだ寄作人であつたと考えている（寄作人⇨浪人であつたとは考えがたい）。

したがって、東大寺領越前国道守莊においても、〈百姓⇨莊民〉＋〈寄作人⇨寄人〉が墾田・口分田などの莊園耕地耕作の労働力主体であつたと充分考えられる。

ただ、初期莊園成立にともなう旧墾田主や旧口分田主および治田主であつた戸主・戸（戸口）などの百姓が〈莊民〉⇨百姓として存在し続けたかは、天平神護年間以後の史料にはほとんど表示されなくなるために、彼ら百姓の足取りをたどることは困難である。また、彼らが〈寄作人〉として莊園内で存続し得たものかも明確ではない。

ただ、百姓と称されてきた戸主・戸（戸口）が、八〇〇年代後半以降には、「戸主〇〇〇〇」「戸（戸口）〇〇〇〇」と表示されなくなことは確かである。

言い換えると、現存する史料で墾田の場合には、元慶三（八七九）年五月二十七日付の「大和国矢田郷長解」の「常地与売右京八条三坊戸主、従八位下毛野公下野既訖」という文言、治田の場合には、寛平八（八九六）年五月十九日付の「某郷長解写」の「沽与常地右京六条二坊戸主□□位上宇称備真人貞寵□□従六位同姓池主既畢」という明示以後、戸主・戸（戸口）の用語は史料から消えていく。

この事象は、単に戸主・戸（戸口）の用語が史料上から長く消えるという理解にとどまらず、初期荘園立荘当初の荘田Ⅱ墾田・治田・口分田の耕作を支えた彼ら百姓の労働力主体の変革が内在していたとも想定できるであろう。そして、この事象前後の労働力的情況を大雑把にみると、八〇〇年代中頃には「田刀」が出現し、九〇〇年代初頭以後になると「田刀」「田墾」の用語と労働力主体としての動向が頻繁に史料に現われてくる。⁽³⁰⁾

たとえば、貞観元（八五九）年十二月二十五日付の「近江国依智荘検田帳」の「田刀前伊勢幸依知秦公安雄」と、また延長二（九二四）年八月七日付の「東寺伝法供家牒案」の「田刀僧平基」という文言を、⁽³¹⁾ここでは挙げておくが、詳しくは後述していきたい。

さらに、すでに触れた「寄作人」（後に「寄人」の用語を頻繁に使用）の用語が現われるのが九〇〇年代中頃であり、これ以後に寄人は荘田耕作の労働力主体として活躍する史料が目立つようになる（浪人↓寄作人↓寄人という図式で考えるならば、八〇〇年代中頃に寄作人Ⅱ寄人が内在していたことになる）。⁽³²⁾

したがって、道守荘を含めて越前国の東大寺領の初期荘園の多くは、天慶五（九五二）年十月二十三日付の「越前国足羽郡庁牒」にみる「道守鎧荘田雖在条里、本自或荒野、或原沢、更無□寄作人、糞置荘田胃所不聞也」云々という記載のように、荘内に「寄作人（いわゆる村井説の寄作浪人か）」が存在しなかったゆえに荒廃化しつつあ

つたと考えられなくはない（だが、『更無□寄作人』という文言には、荒廃した要因に寄作人がいなかったとは明示していない）。ただ、この郡庁牒の記載を別の視点で捉えるならば、越前国における東大寺領の多くの初期荘園では、九〇〇年代中頃以前には〈寄作人〉が荘域に存在していたことになる。そして、浪人↓寄作人⇨寄人の図式を、さきの村井康彦氏の論稿に視点を合わせるならば、浪人⇨寄作人⇨寄人という図式に移行し得るとともに、越前国東大寺領の初期荘園には浪人（浮浪人）⇨寄作人⇨寄人が存在して荘田耕作の労働力主体となっていたことになる。

しかし、初期荘園の編成の原動力になったと想定し得る労働力主体に〈寄作人〉と無関係でない〈田刀⇨田堵〉の存在を考えないわけにはいかない。田刀⇨田堵の出現時期も八〇〇年代中頃であり、九二〇年代以降には史料上に頻繁に現われる。そして、荘園において田堵が荘田耕作に従事する労働力主体としての立場を確立していく事象は見逃せない（例証もなく大胆に想定すれば、〈寄作人〉は田堵の前身かもしれない）。

では、次に百姓としての戸主・戸（戸口）を留意しながら、寄作人・寄人および田刀⇨田堵と初期荘園における耕営にともなう労働力主体について詳しく検討することにしよう。

註

- (1) 『東南院文書之二』第五二五号文書（『大日本古文書・家わけ一八 東大寺文書之二』所収。以下同様にて、東南院文書二一五一五というように略す）

- (2) 東南院文書二一五二一

- (3) 道守荘の荘田数は、生江東人寄進の墾田と東大寺買得・相替の墾田・口分田とは耕作での労働力主体が異なると考えられる。つまり、本文後半で論及する予定であ

る奴婢や浮浪人、あるいは戸主・戸などの百姓などによつて、耕営における労働力は異なるかもしれないと想定し得る。

- (4) 藤原生大『日本庄園史』

同書では、全般にわたつて奴婢をもとに奴隸制を展開し、『日本型奴隸制を構成した』と提示している（『庄園の本質』）。

渡部義通『初期庄園の構造と生産諸関係』（『古代社会

の構造」所収)

吉村武彦「初期庄園にみる労働力編成について―東大寺領越中・越前庄園―」(『原始古代社会研究Ⅰ』所収)

右の諸氏以外にも「奴隸制」についての論稿はあるが、奴隸制を主体にした論究を掲げたことを明示しておきたい。

(5) 東南院文書三一三六〇

(6) 東南院文書三一六三八

(7) 東南院文書三一六四二

(8) 岸俊男「東大寺領越前庄園の復元と口分田耕営の実態」(『日本古代籍帳の研究』所収)

藤井一二「初期荘園と地方豪族」(『初期荘園史の研究』所収)

(9) 藤間、前掲書

渡部、前掲書

(10) 東南院文書二一五〇〇

(11) 東南院文書二一五〇四

(12) 吉村、前掲書

同論稿では、郡司解によつて「賃方式が本源的で租方式が二次的關係」と言及し、「賃租制に対する有力農民の参加はいわば必然的な傾向」と論及している。

(13) 小野武夫「成立期庄園の形態」(『日本庄園制史論』所収)

(14) 丸山幸彦「初期庄園の形成と展開」上・下(『日本史研究』第一六四号・一六五号所収)

渡部、前掲書

藤井、前掲書

(15) 渡部、前掲書

(16) 東南院文書二一五四五

(17) 筒井英俊校訂『東大寺要録』

(18) 東南院文書二一五二八

(19) 西岡虎之助「荘園制の発達」(『荘園史の研究』上巻所収)

(20) 戸田芳実「国衙領の名と在家について」(『日本領主制成立史の研究』所収)

黒田俊雄「荘園制の基本的性格と領主制」(『日本中世封建制論』所収)

村井康彦「荘園と寄作人」(『古代國家解体過程の研究』所収)

同書で村井氏は「墾田地系荘園が、寄作人と呼ばれる非荘民によつて開墾・耕営された」とし、荘園制の本質を「土地の支配」であり、「人間の支配」を含まないと論及している。

網野善彦「荘園公領制の形成と構造」(『日本土地制度史の研究』所収)

同論稿で、土地の支配者は「寄人等の形で人を従属させている」と述べるとともに、耕作人の土地に支配を及ぼすと提示し、村井説とは異なる理解を示している。

(21) 『平安遺文』第一巻、第二六六号文書(以下同様にて、平安遺文一一二六六というように略す)

(22) 平安遺文二一三〇七

(23) 平安遺文二一三六五

(24) 平安遺文二一四五〇

(25) 村井、前掲書

(26) 平安遺文一一六八

(27) 村井、前掲書

(28) 平安遺文一一七三

(29) 平安遺文一一八二

戸主・戸（戸口）の用語は、八〇〇年代中頃に消長するが、寛弘元（一〇〇四）年には、「戸主」云々という用語は「讃岐国入野郷戸籍」にみえる（平安遺文二一四三七）。

(30) 平安遺文一一二八

この史料から、「口分戸主依知真象」「依知秦公益繼」が「戸主」であったことが窺える（益繼が「戸主」であったことは別の史料「平安遺文一一一七」からわかる）。また、同史料によって、元興寺領近江国依知荘（愛智荘）における戸主・戸（戸口）の動向が若干窺える。

(31) 平安遺文一一二九

(32) 平安遺文一一二六三

(33) 村井、前掲書

三、労働力主体の変移からみた初期荘園の再編と展開

初期荘園の形成にともなう労働力主体が、戸主・戸（戸口）などの百姓と奴隸としての奴婢であることを、道守荘を含む越前国東大寺領からみてきた。そして、一般的には初期荘園の成立後の八〇〇年代中頃から後半にかけて、戸主・戸（戸口）が史料から久しく消え、その用語すら史料からなくなる。彼らが消え去る八〇〇年代中頃以降、浪人（浮浪人）が荘内に寄住して荘田を耕作する「寄作人」と捉えられるとともに、この時期に寄作人として現われはじめたことになろう。しかし、浪人＝寄作人とする史料が現段階でない以上、寄作人が史料上に現われはじめた時期は、九〇〇年代中頃となる。すでに、このことは寄作人（＝寄人）に関する史料を挙げて指摘したつもりである（「寄人」の用語は一〇〇〇年代以降も現われる）。

一方、田刀＝田堵の用語が史料にはじめて現われるのは、八〇〇年代中頃である。ただ、田刀＝田堵が史料上に

頻繁に現われるのは、九〇〇年代中頃以後になる。そして、この時期以後には、「田刀」から「田堵」へと用語の変化をみせながら、荘園の荘田耕作に従事する存在が、史料に数多くみられる（以後、史料上での「田刀」の表示以外は、「田堵」と統一して明示する）。

まず、荘園とかかわり深い田堵に関する九〇〇年代中頃以降の史料を次に四つほど挙げて、荘田耕作する田堵の状況を窺ってみることにしよう。

(a) 天慶三(九四〇)年五月六日付の「筑前国観世音寺牒案」⁽¹⁾

牒、件荘田故前典侍從四位下源朝臣珍子忌日法事并益供料、(中略)、所施入観音宝殿也、(中略)、寺家領掌件田、尋有縁田刀、仰可預作由、而相憚□役頻多、无有預之人、(下略)

(b) 永祚二(九九〇)年十一月八日付の「尾張国郡司百姓等解」⁽²⁾

件米、如此費都在田堵百姓等、抑勘益出田之使、長官与祿田五六町、因之弥誇無道、(中略)、亦自田堵五人、手、所責取絹三四疋也、又一二疋也、一郷所注田堵僅四五(十)人也、(下略)

(c) 寛弘九(一〇一二)年正月二日付の「和泉国符案」⁽³⁾

可普仰大小田堵古作外令発作荒田事

右興復之基唯在勸農、(中略)、然則寛弘五年以往荒廃公田者、縦是大名之古作、可令許作小人之請申、但有本名不荒古作、猶共欲加作者、郡司慥其新古之坪、可停他名之請申也、(下略)

(d) 寛徳二(一〇四五)年五月十八日付の「関白家政所下文案」⁽⁴⁾

一 可早并進同荘田去兩年地子物等事

右同荘安吉愁状云、件輩為田堵、年來耕作荘田、不并落地子物、或称八幡宮寄人、或号殿下散所雜色、(下略)

九〇〇年代中頃から一〇〇〇年代中頃までの田堵に関する史料を四例掲げたが（傍点・傍線―奥野。以下同様に略す）、田堵には有縁者が存在し、荘田を預作していること（a）、田堵の耕作地には地子物の弁済が課せられていること（b）（d）、田堵の大小にかわりなく古作以外に荒田の加作ができること（c）、そして田堵による荘田耕作にともなう地子物を「寄人」あるいは「散所雑色」と自称して弁進しないこと（d）などが窺える。

そして、九〇〇年代中頃から一〇〇〇年代に至る荘園における田堵は、預作または請作をおこなって課役弁進を負わされていること（a）（d）、九〇〇年代後半と一〇〇〇年代前半の田堵は、公領の耕作をおこなって地子物を責め取られたこと（b）（c）などが窺える。

このように田堵は、八世紀中頃に史料に現われて以後、すでに九〇〇年代中頃には、荘園・公領において荘田や公田の耕作の労働力主体として活躍していたことが理解できる。

それゆえに、延長二（九二四）年八月七日付の「東寺伝法供家牒案」の

欲被任先例、免除大山荘預并荘子等臨時雜役状、

在多紀郡莊別当僧平秀 專当乙訓益福 田刀僧平基 僧勢豊 僧平増

という記載に現われる「田刀」は、すでに九〇〇年代前半に荘田耕作する存在であつたといえよう。

そこには、百姓として把握されている戸主・戸（戸口）が消え去る時期から掛け離れる事なく「田堵」と「寄作人」が現われる事象は、初期荘園における労働力主体の存在形態の変化による編成を余儀なくさせたのではないだろうか。

さらに、承平二（九三二）年十月十五日付の「伊勢太神宮司解案」にみる浪人の大規模な治田隠作と田堵らによる散田請作も、初期荘園編成に関係する事象として視野に入れるべきであろう。すなわち、「一処川合勅旨田六十町」「一処大国荘百八十五町九段百八十歩」に関連して、

嘉祥二年班田之時、^(件)□二箇莊田為百姓口分治田、何況不定四至六十六町本領田、^(中略)、而為他妨領田地七十町五段百四十步、其^(中)□熟田四十九町五段百四十步之中、称公田、妨作十五町、号土浪人私治田、隱作二十四町五段百四十步、^(中略)、又今年春時為使眞演差遣彼兩莊、令散田於田堵、亦畢、^(下略)

という記載があり、嘉祥二^(八四九)年の班田收授によつて、川合・大國兩莊の本領田の四至設定、否のこともあるが、領田の内、十五町は妨作され、土浪人によつて隱作されていることがわかる。そして、田堵らに散田（請作）させていることも窺える。

言い換えると、①班田收授にともなつて川合・大國兩莊の莊田（おそらく莊域内）が口分田・治田となり、②春時に使者を遣わせて田堵らに請作させたことが明示されている。

これらの事象によつて、八〇〇年代中頃には、すでに莊園領域に口分田主や治田主とともに、浪人と田堵が存在し、その是非はともかく、浪人・田堵が莊田耕作の労働力主体であつたと考えられる。さらに、七〇〇年代中頃には、百姓である戸主・戸（戸口）と奴婢が公田・莊田の労働力主体であつた段階から、田堵と寄作人・浮浪人などが公田・莊田（公領・莊園）の労働力主体として活躍する八〇〇年代の段階へと移行していったという想定も成り立つであろう。

しかし、この八〇〇年代の段階には、貞觀元（八五九）年十二月二十五日付の「近江国依智莊檢田帳」をみるかぎり、「田刀」と「戸主」が共存する状況があつたと考えられる。すなわち、勘定した依智莊の水田三町三一〇歩の現況―現耕作地を常荒地と称することや莊域条里坪の耕地が百姓地になつてゐることなどを含めて―の記載後に、十八胡桃本田一段七十歩

右二坪、本自中田、今臨地見尤是上田、因茲召問田刀、前伊勢、率依知、秦公、安雄、^(中略)、

三十五下古家田五段二百歩下

右坪、田・刀・依・知・大・富・愁・云、此田唯有名少実、无由進地子、(中略)、前々寺所預三段二百歩、被奪公田二段也、披陳其由、口・分・戸・主・依・知・真・象・申・云、己不知寺田給口分、(下略)

とあり、依知秦公安雄という人物が田堵で、依知真象という人物が口分田戸主であることが窺える。⁽⁸⁾そして、同検田帳の一条二八坪の六段二四〇歩の内、「右坪、南一段十六歩、依知秦公益継称、已治田沾進日向守藤原頼基朝臣宅」という記載にみえる依知秦公益継という人物は、仁寿四(八五三)年十二月十一日付の「近江国大國郷墾田売券」から、売主の戸の戸主であつたことがわかる。すなわち、

十一條八里三十門田一段戸主依知秦公益継戸同平刀目女土

右件墾田、所負庸米二石充価直、切常土売進東大寺衙既訖、(下略)
という記載がそれである。⁽¹⁰⁾

さらに、承徳三(一〇九九)年八月二八日付の「左衛門少志中原資清勘文案」にみえる次の記載によつても、戸主・戸(戸口)の百姓と田堵は八〇〇年代中頃に共存していたことが窺えよう。すなわち、「東寺領川合勅旨田并并大國莊成願寺領川合莊相論二十五箇坪内田地十七町段二百十歩理非事」^(脱アラシ)に関する文言に、
一通

(中 略)

承和十二年十一月十五日国司進相博田官符請文副文四通

一通、多氣飯野両郡司下田堵戸主符^{有郡判}

一通、国司下両郡庁宣^{有国幸據等判}

件相博田官符請文、有印并国守及大掾等判、

但或注条里不顯坪付、或雖注条里不載坪付、

初期莊園をめぐる変革と展開

という承和一二（八四五）年の官符請文の四通の内には、郡司が下した「田堵戸主符」一通が存在していた。¹¹

この「田堵戸主符」という文言から、田堵すなわち戸主と解釈ができる反面、田堵と戸主という理解が成り立つ。後者の理解による「田堵」と「戸主」であつたこととの妥当性を表わす史料があり、時期が少し下るが、次に提示しよう。すなわち、長承二（一一三三）年五月 日付の「伊勢国大田荘田堵住人等解」の

大田御莊田堵住人等解 申請 本家 裁事

（中 略）

在管飯野郡十一條六井於里坪々

同里号二坪田二反百二十步、御正作田也、而種蒔耕作後并手郷兄国子屎戸破取、同里以十五坪今改十一坪桑

畠六反三百四十步□之申

一反三百四十步、同戸破取、

一反兄国郷□□小藤子戸破取、

（中 略）

同里以二十三坪改十三坪田二反百四十步、兄国郷石部貞吉戸破取、

同里以二十二坪改十四坪田□反八十步、畠一反、兄国郷秦菅町戸破取、

（中 略）

右、謹承旧記、件御莊者、布施内親王御領也、而以承和年間仁明天皇御時被建立、勅施入桓武天皇御願東寺由、顯然也、（中略）、是以自延喜班田之時以来、戸与莊各数百歳之間、無相論令領掌来也、而今彼戸主等背棄旧領、図合坪坪巧横惑、（中略）、望請 本家裁、任省図勘文及代代相伝旧領道理、被停止件戸主等非道之妨者、以将仰本寺御威之嚴矣、（下略）

という記載および「伴得久」「長久枝」「藤原枝成」「佐伯友久」「大神真枝」「藤原行正」ら〈田堵住人〉⁽¹²⁾の連署によつて、史料上には現われることがほとんどなかったが、一一〇〇年代中頃まで田堵と戸主らが共存していたことと、東寺領大国荘の田堵と神郡封戸給主である戸主・戸の横妨相論の情況が窺える。そして、田堵と戸主らの相論は、翌長承三年に持ち越される。このことは、長承三(一一三四)年十一月二十九日付の「伊勢国大国荘專解」の記述からもわかる⁽¹³⁾。

このように八〇〇年代中頃の東寺領と成願寺領との相論は後世にまで引き継がれ、荘園耕地の労働力主体である田堵と自称封戸給主である公田の労働力主体である戸主・戸との耕地相論へ展開していったことが窺えるとともに、初期荘園における労働力主体であつた戸主・戸(戸口)といわれた律令的呼称の百姓は、いわゆる荘園・公領制社会で生き続けていたことがわかる(ただ、大国荘における東寺と成願寺との相論から、大国荘田堵と律令制的遺制の戸主らとの相論へ至る事象は特殊なものと考えられなくはないという理解も成り立つ)。

このことはともかく、七〇〇年代中頃に成立する初期荘園を支えてきた百姓である戸主・戸(戸口)による耕地への主体的労働力は、八〇〇年代中頃には田堵による主体的労働力に移行していったことになる。

言い換えると、戸主から田堵への労働力主体の移行が、初期荘園の耕営における労働力の編成を余儀なくさせたといえるであろう。このことから、初期荘園の第一期の編成時期は、田堵が出現してくる八〇〇年代中頃と考えられる。

さらに、この時期以前に現われる「浮浪人」「土浪人」と称された浪人は忘れられない存在であり、彼らも労働力主体である。このことは、すでに承和八(八四二)年二月十一日付の「某家政所告状」にみえる「件浪人元是寺家荘所管」云々と明示された「浪人」の出現でも窺え、この元公民百姓であつた浪人の荘園への流入が考えられる。浪人の流入は、すでに延喜年間以前から進んでいたこと、浪人流出を避けることができなかつたゆえに、国家的

規制をおこなわなくなったこと、そして浪人に対して課役を徴収することなどが、次の四つの史料から窺える。

I. 『類聚三代格』の延暦四（七八五）年十二月九日付の「太政官符」の「応徴大宰内九国百姓浮浪九国調庸事」に⁽¹⁵⁾、

奉 勅承前之例、大宰所管百姓。浮浪管内国。不輸調庸。唯徴他界浪人課役。（下略）

II. 『続日本紀』の延暦九（七九〇）年十月十一日の条に⁽¹⁶⁾、

請仰左右京。五畿内七道諸国同等、不論土人浪人及王臣仰使。（下略）

III. 『類聚三代格』の弘仁二（八一二）年八月十一日の条、「太政官符」の「応浮浪人水早熟之年准平民免調庸事」に⁽¹⁷⁾、

云和銅八年五月一日格称。天下百姓多背本貫。浮浪他郷。（中略）。浮浪逗留經三月以上輸調庸。仍録国郡姓名。（中略）。望請。件浪人等。遭水旱者。准於平民。免其調庸者。（下略）

IV. 『日本三代実録』の貞觀十五（八三三）年十二月十七日の条に⁽¹⁸⁾、

今須班田之日。捉良田九百五十町、不論土浪人。頒充令耕佃。（下略）

史料Iから史料IVまでをみるかぎり、土人と浪人を問わないことを容認する以前から、本貫の国を離脱した元公民の浪人が存在し、彼ら浪人（浮浪人）に対しても調庸を課したことが窺える（史料のI・III・IV）。また、浪人への調庸賦課の基盤には国郡名や浪人の姓名の記録帳の存在が示唆されている（史料のIII）。

これらの状況から、すでに七九〇年代以前から本貫地離脱の多くの浪人が存在し、公民百姓と同様の立場で把握することを容認した律令国家にとって、調庸賦課を課すことで律令国家の解体を遅らせたと考えられる。

そこには、初期荘園が成立した七六〇年前後から公民百姓の本貫地からの離脱によって公田への労働力主体は減少し、荘園流入にともなつて荘田に対する労働力主体の確保が容易になったととえるであろう。ただ、律令税制

は、浪人に対して調庸を賦課したとしても、以前のように安定したものではなかったことは確かである。

このような事象を窺うかぎり、初期荘園成立後、荘園機構・経営を編成させる必要に迫られた要因の一つに荘田耕作の労働力主体の移行があったからだと考えている。

そして、初期荘園の編成に大きくかわった労働力主体は田堵であり、寄作人であったと想定している。ただ、田堵や寄作人を生み出したのは、本貫地を離脱した浪人の内で、承平二（九三二）年の「伊勢大神宮司解案」でみた二四町の治田を隠作し得た有力な浪人が、田堵や寄作人へと展開していく階層のものであると考えられなくはないであろう。

しかし、「むりやり貸しつけた物を取りたて、たくさん利息をとり、その報い悪死した話」という説話集に現われる大領の妻の行為によつて逃亡した人たちの大半の实情は、あたかも本貫地を離脱した浪人の状況を表現しているようである。すなわち、その情況の記述を掲げると、

田中真人広虫女は讃岐国美貴郡の大領外従六位上小屋県主宮手の妻である。八人の子を産み、裕福で多くの財宝を持っていた。牛馬、使用人、稻、錢、田畑などがあった。生れつき、（中略）、貸したものを人からしぼりとっても満足しなかった。そのため大勢の人は全く困つて、家を捨てて逃げ、他国を流浪することその極に達した。

という記載がそれで、大領の妻である広虫女は数多くの財宝を持ちながら、欲深くて、貸付けた物は絞り取る（利息は強引に取り立てる）という情況によつて創出される多くの借財に追われた在国離脱者＝浪人の存在は見逃したい（説話集の創作的物語性を充分考慮したとしても往時の社会情勢を表現していると考えている）。

このように多くの浮浪人の輩出にともなう労働力増大も荘園機構の变革を担ったとしても、すでに述べたように初期荘園を編成させる原動力になった労働力主体は、八〇〇年代中頃に現われて、その後の荘園公領制において主

導的立場で莊田・公田の耕作に従事する〈田堵〉であると考えている。そして、さきに述べたように田堵出現ともなつて、初期莊園が編成・変革を余儀なくさせられた時期は、八〇〇年代中頃であつたと考えられる。

さらに、もう一つ考えられる初期莊園の再編成・変革の時期は、九〇〇年代前半から中頃にかけてではないかと想定している。

この想定 の 根底には、寄人の活躍がある。とくに、史料に現われる〈寄人〉は、七〇〇年代中頃に莊園に寄住して寄作するいわゆる〈寄作浪人〉とは異なると考えている。このことは、寄人に課せられた臨時雑役の免除の状況と、すでに別稿で明示したように田堵が寄人と称する（称される）ことから想定し得る。²¹

この寄人については、すでに村井康彦は論究されているが、招越した他国人民Ⅱ浪人Ⅱ寄作人Ⅱ寄人という村井説の〈寄人論〉が寄人の実態を示すものかは、寄人にかかわる史料をさらに検討すべきかもしれない。

このことよりも現段階では、寄作人Ⅱ寄人という解釈ではなく、田堵Ⅱ寄人という理解をもとに寄人と臨時雑役から検討することにしよう。そこで、臨時雑役免除とかかわつて寄人が出現しはじめ、その後の動向にかんする史料を三例ほど次に掲げて、九〇〇年代中頃に初期莊園が再編成・変革を迎える例証にしたい。

まず、史料上に寄人が現われるのは、天慶五（九五二）年九月十五日付の「太政官符案」にみえる「應為不輸租田醍醐寺所領曾称莊并免莊司寄人等臨時雜役事」という文言であり、元慶七（九五三）年八月五日付の「民部省符案」の「而依宣旨、以天慶二年二月二十八日施入寺家、爰可免除莊田租稅莊司寄人雜役之由」という記述である。²²

またその後、一〇〇〇年代前半から中頃までの寄人の状況は、治安三（一〇二三）年十一月二十三日付の「太政官符案」の「応免除紀伊国名草郡薬勝寺所領田二十町租稅官物并臨時雜役寄人二十人等事」という文言と、永承五（一一五〇）年七月二十一日付の「太政官符案」にみる「当国狭少之地、所在莊園四十五箇所之中、免田九百八十余町、寄人千二百八十余人也、（中略）、又自本莊園所加免寄人三百余人也、公民遺少」という記載によつて、莊

園における荘田耕作に従事する多数の寄人の実情と耕作すべき荘田の労働力主体である寄人の存在が窺える。

ただ、一〇〇〇年代以後の寄人の存在形態は、直接初期荘園の再編・変革とかわらないので詳しくは触れないが、寄人が荘園領域で労働力主体として存在しはじめた九〇〇年代中頃に再び編成・変革を余儀なくせられていったと考えられる。そして、その再編成の荘園機構が終焉を迎えるのは、おそらく一〇一〇年代前後ではないかと考えている。

それは田堵から名（名主）への変移の時期であり、この田堵から名（名主）へと導く契機となった公田を耕作する田堵の寄作（請作）状況である。このことを想定させる史料は、周知されている寛弘九（一〇一二）年正月二十二日付の「和泉国符案」の「縦是雖称大名之古作、可令許作小人之申請、但有本名不荒古作、猶共欲加作者、郡慥檢其新古之坪、可停他名之申請也」という記載であり、すでに触れたように「本名」「他名」という文言である（大名に対しての「小人」は「小名」を表現したもので、大名田堵と小名田堵であったと一般にわれている）。

この国符案の「田堵」と「名（名主）」とのかわりについて、村井康彦氏は「かくして名（負名）とは、そのままでは占有権・私有権を内包せず、（中略）あくまでも貢納責任者の名そのものの、それゆえその名が付されている収取Ⅱ負担の単位・規模、あるいは請作地の規模を示すものに他ならない」と論及されている⁽²⁸⁾。

この村井氏の「名（みょう）」に対する是非を検討する余裕はここではないが、国衙が田堵の請作地に「本名」「他名」と「名」を付加したことは、国衙容認の本名・他名であったといえよう。そして、荘園における田堵による「名（名田）」形成の契機がこの時期に内在していたと想定し得るとともに、一〇〇〇年代前後に至って初期荘園は、いわゆる寄進地系・王朝期荘園へとゆるやかに変革していくと考えられる（従来より自墾地系に対して寄進地系と呼称されているが、便宜的にでも「初期荘園」に対して「王朝期荘園」と称する方が妥当ではないだろうか）。

註

(1) 『平安遺文』第一卷、第二五〇号文書（以下同様にて、平安遺文一一二五〇というように略す）

(2) 平安遺文二一三二九

(3) 平安遺文二一四六二

(4) 平安遺文二一六二三

(5) 平安遺文二一一一九

(6) 平安遺文二一二四二

(7) 平安遺文二一一二八

(8) 平安遺文二一八七

(9) 平安遺文二一一二八

(10) 平安遺文二一一一七

(11) 平安遺文四一一四〇七

(12) 平安遺文五一一二七二

(13) 平安遺文五一一三〇七

(14) 平安遺文一一六八

(15) 『類聚三代格』後篇（増補国史大系本）

(16) 『続日本紀』後篇（増補国史大系本）

(17) 『類聚三代格』後篇（増補国史大系本）

(18) 『日本三代実録』後篇（増補国史大系本）

(19) 平安遺文一一二四二

(20) 『日本靈異記』（東洋文庫本）

(21) 奥野義雄「田堵をめぐる存在形態―田堵の成立・展開とその実態によせて―」（『鷹陵史学』第二九号（仏教大

学史学会刊）所収）

(22) 村井康彦「莊園と寄作人」（『古代國家解体過程の研究』所収）

同論稿で「田堵Ⅱ寄人・寄作人の莊公両属性の解消」と行論されて、田堵Ⅱ寄人Ⅱ寄作人と認識されている。

この村井氏の「寄人」Ⅱ「他国之人民」の招越は平安遺文一〇八三の「美濃国一処 字泉江莊」の記載にみえる「莊司住人等皆悉死」ことによるものであった。

(23) 平安遺文一一二六一

(24) 平安遺文一一二六六

(25) 平安遺文二一四九三

(26) 平安遺文三一六八一

(27) 平安遺文二一四六二

(28) 村井康彦「田堵の存在形態」（『古代國家解体過程の研究』所収）

同論稿で、「田堵と名主とは、名Ⅱ請作權（地）と名田Ⅱ私有權（地）」であると明示され、〈名〉と〈名田〉とを区別されている。田堵Ⅰ〈名〉Ⅰ国衙領、田堵Ⅰ〈名田〉Ⅰ莊園という理解も成り立つであろう。

黒田、前掲書

同氏は、同書で「田堵といわれたものは、けっして単一の階層からなっていたのではない」と言及されて、田堵の多元的性格と諸階層を指摘している。

結びにかえて

初期荘園研究において、労働力に視点をあて、従来の奴隸制にともなう労働力主体の究明と、初期荘園崩壊の論究が批判的に継承され、荘園機構・経営にみる編成および再編の変革によつて次代のいわゆる寄進地系荘園、つまり王朝期荘園へ繋がっていく論究へと展開されてきた。

ただ、初期荘園経営・耕営における労働力主体へ視点が向けられたといつても、耕営請負人と直接的労働力主体百姓（農民）と奴隸を対象に理論的観点を加味しながら、初期荘園研究が導かれてきたといえなくはない。

そして、律令制社会における初期荘園研究は、具体的な百姓である戸主・戸（戸口）と田堵（寄作人・寄人も含んで）を労働力主体にして、荘園経営・耕営を視野に入れないかぎり、編成および再編・変革を導きだし得ないかと考えている。

なぜなら、一〇〇〇年代初めのものと考えられている『新猿楽記』に明示されている百姓・戸主の状況は、初期荘園が変革していくべき労働力主体および荘園の耕営の在り方を示唆してくれるといえよう。すなわち、

三君夫出羽権介田中豊益。偏耕農為業。更無他計。数町戸主。大名田堵也。

という文言がそれである^①（傍点―奥野）。この文言によるかぎり、権介田中豊益という人物は、数町（耕地）保有の「戸主」であるとともに、「大名田堵」であつたと読みとれる。

この史料によると、百姓・戸主（有力戸主といえる階層）は単なる百姓ではなく、大名田堵でもあつたことが窺え、「田堵」の動向（出現・形成・発展など）にともなう労働力主体を究明する足掛かりを検討するならば、初期荘園の編成および再編の段階的変革がわかると考えたのである。

したがって、労働力主体に視点を絞つて「戸主・戸（戸口）」「寄作人」「田堵」の階層を史料から検討したかぎ

り、

①編成期は八〇〇年代（九世紀）中頃から九〇〇年代（一〇世紀）中頃まで

②再編期は九〇〇年代中頃から一〇〇〇年代（一一世紀）前後まで

という初期荘園の展開が提示し得る。

ただ、初期荘園の編成および再編（変革）の時期を経営・耕営の基盤である労働力主体の移行の検討に終始して、律令税制との関連性や荘園構造・機構などを論及し得なかつたことは諷めない。とくに、赤松俊秀氏によつて論究された租庸調が人に課した時期から土地（耕地）に課した時期へと変化する事象は、労働力主体の検討と関連させるべきであつたと考えている。さらに、石母田正氏による初期荘園における政治的事態の変移についての視点も加味させて検討すべきであつたが、別の機会に考えることにして、初期荘園から王朝期荘園へと展開していく過程には、二つの変革期（編成・再編成）を迎える基盤に労働力主体の移行があつたことと、いくつかの検討課題があることを明示して結びにかえたい。

註

（１）『郡書類従』第九輯（文筆・消息部）

（２）赤松俊秀「公営田を通じて見たる初期荘園制の耕造について」（『古代中世社会経済史研究』所収）

（３）石母田正「古代の転換期としての十世紀」（『古代末期政治史序説』所収）